

鹿 9 鹿撃つ狩人 = = = 猪・鹿・狸より

もう五〇年も前に死んだが、東郷村出沢の鈴木小助と言う男は、名代の鉄砲上手であったと言う。屋敷の前の柿の木には、いつも鹿の二つや三つは吊るしてあるほどだった。ある時家の縁先において、二つの鹿を一度に撃ちとめたことがあった。朝まだ床の中にうとうとしていると、前に起きた女房が、はや向うの道を引鹿が通ると呼ぶ声に、むっくり起き上がるや否や、枕元の鉄砲を取って縁先へ出ると、如何にも見事な雄鹿が二つ、後になり先になりして、谷向うを、谷下村へ越す道を登って行った。その鹿が二つ重なりあった時を待って打ち放した丸が、見事に手前から後の鹿を斃したと言うのである。

小助は名の如く体は至って小さかったが、鉄砲は名人であったと言うて、今に噂が残っている。猪鹿買いが獲物払底の折は、かならず小助の家へやって来て、上り端へ寝込んだそうである。するとしぶしぶ支度をして出かけたが、出かけ端に、もし鉄砲が鳴ったら、その方へ迎えにお出でと言うのが癖だった。かつて一度もその言葉に誤りはなかったそうである。小助も鉄砲上手に違いはなかったが、獲物もまた余計にいたことも事実だった。

小助が鉄砲上手の話はまだあった。その頃、村の梅の窪と言う処に性悪狐が棲んでいて、時々村のものを悩ましたそうである。その狐が、小助の鉄砲ならちっとも恐ろしくないと嘲ったそうである。そして小助の老母に取り憑いて、どうしても離れなんだ、これにはさすがの小助も弱ってしまった。そこである時鉄砲に紙丸を詰めて、一発天井に向けて放して置いて、今度は真丸で撃つと嚇したそうである。それには狐が閉口して、明日の朝は間違いなく出て行くからと、誓いを立てたそうである。そんなら確かな証を見せよと掛け合って、行掛けに屋敷向うの谷下村へ越す途中で、片足上げて合図する約束をさせた。その代わり撃ってくれるなと狐が念を押したそうである。承知して朝になるのを待っていた。翌朝早くから起きて屋敷から見ていると、如何にも谷下村へ越す坂を、狐が一匹ぶらりぶらりと登って行った、そのうちちょうど屋敷の正面辺りへ来たところで、如何にも片足上げて合図をした。そこをどんと一発欺し撃ちに撃ってしまったと言う。

この小助の兄弟であったか、あるいは親戚であるか判然記憶せぬが、長篠村浅畑(あさばた)に、某音五郎と言う狩人があった。鹿狩にはやはり名代の剛の者であったと言う。格別逸話としては聞かなんだが、ある朝起きて戸を開けると、表の真ん中に巨きな山犬が坐って、口を開いて何やら嘆願する様子であった、傍へ寄って口中を検めて見ると太い骨が咽喉に立っている。それを除いてやると、嬉しそうに尾を振って立ち去った。そして翌朝になると見事な大鹿が門口に持って来てあった。猪の話の中にも言うた山犬の報恩話の一つである。